

探訪 北の風景 ⑥

地元のカラマツを生かす 森林バイオマスのまち 十勝管内・足寄町

萩本和之

ベストセラーの「里山資本主義」(藻谷浩介、NHK広島取材班著)を読まれたことがありますが、11版30万部を突破しているという。マネー中心のグローバル経済を脱し、21世紀型発想の社会を記している。その一例として岡山県の山間地、真庭市とオーストリアで実践されている木材活用のユニークな地域活性化策を紹介している。

ここ十勝管内足寄町も町有林のカラマツを生かして、役場や中学校など公共施設を建設したほか、木質ペレットを生産。地元雇用の拡大と、エネルギーの「地産地消」を通じて「地域内での富の循環経済」を実現している。

同町の85%弱が森林面積で、沖繩本島とほぼ同じ11万7千畝を有する。ところが、基幹産業の一つ、林業は1964年からの外材の輸入全面自由

化、さらに木造住宅などの需要低迷に押されて、同町でも、かつて10以上を数えた製材工場は、現在は3社が操業するのみとなっている。

このような状況の中、町有林のカラマツは樹齢50年前後となったため、町職員や町民の中から活用を模索する動きが起きた。特に、町内にある九州大学農学部付属演習林の演習林長、さらに自然エネルギー研究センター(札幌)の大友詔雄センター長らの協力で、当時町の企画担当部署だった岩原榮さんらが中心となって2001年に「新エネルギービジョン」(足寄町木質バイオマス資源活用ビジョン)を策定し、地域活性化策として木材のカスケード(多段階)利用に取り組むことにした。

翌年地元有志ら44人で産学官の「木質ペレット研究会」が発足。研究会がベースとなって04年には地元の造林、設備、建設、燃料事業者など14社(現在19社)が参画した「とかちペレット協同組合」が誕生し、木質ペレットの生産を手掛けている。

一方、公共施設にカラマツ材を利用することになったきっかけは町役場の新築問題。

1992年から検討を始め、当初計画は従来のような鉄筋コンクリートだったが、建設費が掛かりすぎることと、町有林の有効活用などから、2001年にカラマツ材庁舎が浮上した。民主党政権が10年に「公共建築物等木材利用促進法」を制定する前だったものの、町議会は調査検討の結果、先駆的に賛成を表明した。むしろ「今後新た



とかち協同組合が地元木材を活用して生産するペレット
(足寄町役場提供)

に建設する公共施設はカラマツ材を使う」という前向きな条件を付けたほど。

その結果、05年から2カ年にわたり13億4千万円を投じて、木造一部鉄筋コンクリート2階建て延べ4200平方メートルの庁舎(町議会議場を含む)が完成した。町有林の約5800本を伐採、製材して構造用集成材として活用した。

暖房には当然、木質ペレットボイラー。庁舎は木の温もりに加えて床暖房の温もりで非常に暖かく、冬は最低気温が氷点下25℃を下回るほど寒く



町有林のカラマツ集成材で建設された町役場庁舎内。カラマツ材の柱や梁（はり）がみえる。冬は木質ペレットの床暖と地熱利用の換気チューブ=写真右=で温かい

なるものの「2基あるボイラーも1基をわずかな時間稼働するだけで、燃費は石油系のボイラーよりも大幅に安上がりです」と担当の村石靖主査は強調する。実際、熱が余っているために、役場北側に地域交流施設などの高齢者等複合施設を建設して、そこへ供給しているほどだ。

町有林のカラマツ材利用も着々と進み、既に「子どもセンター」（木質ペレットボイラー完備）をはじめ、道内最大規模の木造校舎の足寄中学校や南区コミュニティーセンター、地域交流物産館、



ブロック積みの壁などで厳肅な雰囲気な議場。カラマツ材の活用策などを議論、後押ししている（東洋印刷、足寄町役場提供）

公営住宅などが建設されている。

また「脱石油」のCO2削減を目指す同町に対して、エネルギーの種別・設置地域ごとに見学コースを設定する「次世代エネルギーパーク」（経産省資源エネルギー庁認定）が11年に設けられた。

①役場庁舎や子どもセンター、木質ペレット工場の森林バイオマス②足寄中学校の太陽光発電③町立総合体育館の温泉熱利用④木質ペレットストーブの研究開発などを行っている地元マルショウ技研（株）ショールームのペレットストーブ⑤町立農



木の温かみに包まれて、子ども達の歓声が響く「子どもセンター」

業農村活性化施設と新妻牧場バイオマスプラントの雪氷熱・バイオガスの5つで、観光団体や教育機関と連携をとり観光・学習の場として利用されている。

田中幸壽副町長は「石油高・TPP時代への対応策として確かな手ごたえを感じている」と胸を張っていた。

へはぎもと かずゆき・大学非常勤講師▽